

県と市町の地域づくり連携・協働協議会

‘09・02・10

「地域からの世直しを考える」

—— 世界一、幸せな人々が暮らす三重県づくり ——
へのニューディール政策

多摩大学大学院教授
望月 照彦

第1章 世界経済モデルの破綻

第2章 アメリカの大恐慌が教えてくれたもの(TVA)

第3章 コミュニティデベロプメントという発想

第4章 地域からの世直し

第5章 ABCDパートナーシップ

第6章 世界モデルとしての三重モデル

第7章 3つの「ちえ(知恵・地恵・治恵)」の共同体へ

『地域からの世直しを考える』

世界一、幸せな市民が暮らす三重県
づくりへのニューディール政策

多摩大学大学院教授 望月照彦

地域からの世直しを考える

- 1 世界経済モデルの破たん
- 2 アメリカの大恐慌が教えてくれたもの(TVA)
- 3 コミュニティ・デベロプメントという発想
- 4 地域からの世直し
- 5 ABCDパートナーシップ
- 6 世界モデルとしての三重モデル
- 7 3つの「ちえ(知恵・地恵・治恵)」の共同体へ

第1章 世界経済モデルの破たん

- 1 サブプライム問題に端を発したアメリカ発の大恐慌が現実的になってきている
- 2 住宅の値上がり益を見込んだローン不安が、金融工学の手法で、世界中に広がった
- 3 ブッシュ政権の住宅政策は幸福な住まいではなく投機に、金融工学は強欲資本主義に
- 4 アメリカ人の過大な消費市場を当てにしていた世界経済モデルは、破たんに瀕している

第2章 アメリカの大恐慌が教えてくれたもの

- 1 株・証券や不動産の過熱により、1929年にアメリカはすでに大恐慌を体験している
- 2 資本主義という体制は、不況・恐慌を避けえないとされるが、その症状を抑えることは可能である
- 3 1930年代の大恐慌では、ルーズベルト大統領は様々なニューディール政策という手を打った
- 4 その正否はいまだに議論されているが、アメリカ国民に大きな希望の火を灯した政策があった、「TVA」という政策である

第3章 コミュニティ・デベロプメントという発想

- 1 ジョージ・ノリス上院議員は1933年、ルーズベルト大統領にテネシー河流域に32のダム建設を提案した
- 2 その実行部隊が、特殊法人の「TVA」である
- 3 ダム建設は失業者を雇用し、安い電力は地域に産業を興し、その工場の労働者は消費をすすめ、荒れた流域の環境再生を果たした
- 3 理事の一人はリリエンソールという若き弁護士であったが、彼の開発コンセプトは「コミュニティ・デベロプメント」であった

第4章 地域からの世直し

- 1 コミュニティ・デベロプメントは、「草の根民主主義」を起点とした「世直しの思想」である
- 2 地域市民の豊かな暮らしを実現するということこそ、不況からの脱出するテーマだとしてリリエンソールの真摯な行動は、国民に感動を
- 3 大恐慌が、実は地域社会からのニューデールを求めているという発想は、オバマの「グリーンニューデール」にも繋がるものである
- 4 グローバル時代だからこそ、「地域からの世直し」が大切な意味を持つ

第5章 ABCDパートナーシップ

- 1 国政が混乱し、頼ることができない時代、地域・地方が自らの力で、市民の幸せを創る
- 2 「草の根民主主義」と「コミュニティ・ニューディール」が、大切な“世直し”の力となる
- 3 草の根民主主義とはなにか、行政(A)がビジョンを持ち、企業(B)が経済活力を、市民(C)が自助し、公益組織(D)が社会支援する
- 4 それらが、時には協働し、支え合い、融合して複雑な社会問題を解決するパートナーシップが世直しの基盤となる

第6章 世界モデルとしての 三重モデル

- 1 地域「世直しモデル」として、先進的な取り組みが、三重県の各所に見られる
- 2 多気町の高校生の「まごの店」、コミュニティビジネスとして「モクモクファーム」、亀山市の「亀山モデル」、心の時代の「伊勢講」も重要
- 3 いま、疲弊し地域格差に呻吟する日本の「世直しモデル」として、三重モデルが大きい
- 4 各市町村がそれぞれ「世直しモデル」を創造し、コミュニティ・ニューディールを推進する、市民生活の「豊かさ世界モデル」を三重から

第7章 3つの「ちえ(知恵・地恵・治恵)」資源の共同体へ

- 1 三重県には、3重の「ちえ」資源が存在する
- 2 原点に人間の知恵があり、それを取り巻いて2重目に地域が恵む“地恵”がり、それらを活用する3重目の行政の“治恵”がある
- 3 例えば、「まごの店」には高校生と指導する先生の資源(知恵)があり、地域の豊かな無農薬野菜という資源(地恵)があり、そのビジョンを描いた行政の担当者(治恵)がある
- 4 豊かな人々の暮らしを実現する、3つの“ちえ”の共同体を、三重県は目指そう